

## 地域社会の実相把握の試み — 伝統消費型都市における地域社会構造の分析 —

1. 問題関心
2. 仮設定
3. 調査結果の検討
4. 社会集団とネットワーク構造—地域社会の表層と深層—

天野 徹\*  
高橋 勇 悦\*\*

### 要 約

本稿は、東京都立大学の研究チームによって、平成元年・二年の両年にわたって山形市において行われた調査データについて、都市会の構造に対する二つのアプローチを用いて行った分析結果をもとに、従来の都市社会構造分析の精緻化の可能性を探ろうとするものである。

集団参加に焦点をあわせて行われてきた従来の都市社会構造の分析結果を、地域社会内部におけるネットワーク構造の在り方と照らし合わせて考察することによって、我々は、地域社会に対する理解をより深めることができると考える。ここでは、そのための一つの試みとして、ks-cluster法を用いて地域社会のネットワーク構造の分析を行い、それを社会構造分析の結果とあわせて考察するという方法論の有効性を検討する。

### 1. 問題関心

都市社会額の分野において、“社会構造”をどのように規定するかということは、極めて重大な問題である。いわゆる“都市”を構成するのはとりもなおさず個々の“個人”であり、実際の社会調査はこの“個人”を対象として行っているのであるから、“個人”の属する“社会”が、いかに具体的なものであろうとも、社会調査の中では、それは所詮“擬制”に過ぎないということ是可以する。しかしながら現実の世界には、個々の“個人”のみが存在しているわけではない。個人の意思決定一つ取ってみても、さまざまな他者から影響をうけるということは、疑う余地のない事実といえる。そして、この“他者”が存在するためには、判断主

体による“社会”の想定が前提とされねばならないであろう。このように考えれば、“個人”と“社会”とは、相互規定の関係にあるといえることができる。

周知のようにミルズは、「人間が……自分の意思でしているつもりが、実は個人の方ではいかんともしがたい全体社会の構造そのものに生じる、様々の変化によって支配されている」と指摘した。[Mills, 1959] しかしながら、具体的な個人が、このようなマクロな社会構造との関係を想定した意思決定を、常に行っているとは考えがたい。それは不可能であると同時に、ある意味で、不必要なことでもある。従って、個人は自己の活動範囲を自ら限定した上で、具体的な意思決定を行っている、ということになる。ここではひとまず、

\*江戸川大学

\*\*東京都立大学都市研究センター

こうした活動を通して結び結ばれる、あるいはこうした活動の基礎となる“社会関係”の総体をもって“個人”にとつての“社会”の範疇と考えることとしよう。

さて、この意味での“社会”の様相は、活動主体である“個人”の在り方によって、一様ではない。その一つは個々の“個人”の特性に起因するものであり、今一つは個人の属する“社会”の特性に起因するものであると考えられる。そして、前者を分析するための概念としては倉沢の都市的生活構造論を、そして後者には森岡の都市的生活様式論を挙げることができよう。なお、倉沢の都市的社会構造論は、同氏的生活構造論の対概念といえる。倉沢によれば、「社会構造への個人の参与の状態を仮に生活構造と呼ぶなら、地域社会の社会構造に対応するものとして個人の生活構造を考えることができる。社会構造は分化した諸社会層と諸集団の関係の網の目としてとらえられるが、生活構造は個人がこれら諸社会層と諸集団のいずれに、いかなる役割を通して参与しているか、すなわちこれら集団参与の総体としてとらえられる」〔倉沢、1968〕そして、森岡によれば、「生活構造論は社会財処理過程を、生活主体の整序化の営みとしてとらえ、他方、生活様式論は、これを地域社会・地域住民を共通に刻印づける処理システムとしてとらえた」ものであり、そして「地域社会は、社会的資源の独自の配置を通して、社会財の配置関連を規定し、特定の社会財に依存する生活問題の処理システムをつくり上げている」〔森岡、1984〕とされる。

倉沢・森岡は、社会構造および生活構造を、社会階層および社会集団の概念を用いて規定したことになる。しかしながら、先に述べた“社会”の概念の基礎とするところは、いわゆる社会関係一般であるから、社会構造を個人の集団参加によって捉えようとした倉沢の概念規定に次に示すような難点があるところは、森岡の指摘するところであろう。すなわち、(1)いかなる関係や集団に注目することが参加構造の切開にとって戦略的に有効であるのかが十分に検討されなければならないこと、そして、(2)集団参加分析偏重の弊のあること

である。「都市住民の行動を所属集団によって理解し、説明することは、ますます困難になって」おり、「個人の行動は、任意集団への所属にせよ、集合体への所属にせよ、むしろ関係の網の目の中にこれを位置づけ、ネットワーク形成と把握することによって、よりよく理解されるはずである」〔森岡、1984〕。

森岡による批判は、個々人の資源処理をとまなう生活問題の解決・処理行為の理解を目的とする限り、妥当なもののように思われる。しかしながら、氏の論述では、地域社会と行為主体との関係が、地域集団構造および都市的生活様式という形では定式化されるものの、集団参加以外の形で取り結ばれる諸関係の面における地域社会の状態に関する概念は提示されていない。氏的生活様式論では、地域社会は、「社会的資源の独特な配置」という形で抽象的に規定される。これは氏が、考察の焦点を“個人”の行動においているためであろう。すなわち、現代の都市においては個々人の取り結ぶ関係が地域を越えて展開しており、そうした社会関係が(それぞれの生活場面において)個々人の生活問題処理に資するとの想定のもとに論を展開すれば、少なくとも社会関係を論じるにあたっては、地域社会を前面に押し出す必要はないといえる。個々人の取り持つ社会関係は多様であり、解決すべき問題の内容によって動員される関係の質は異なるであろう。そして、それを問題とする限り、都市において地域社会を論じる意味は薄れるといわざるをえない。

しかしながら、“個人”と“社会”の相互規定を念頭に置けば、こうした社会関係を、地域社会という場において考察することにも意義があるということになる。個々人の具体的な行動に影響するのは、具体的な地域社会であるという見方も成立するからである。つまり、地域社会内で展開する個々の住民の社会関係を考察の対象にする必要がある、ということである。そして、地域の範囲内において、個人を起点として展開する社会関係の束の中において、個人がどのように規定されているのかが問われなければならない。また、個々人が地域内で保持している諸紐帯をもとにして折出

された地域社会の“関係構造”は、集団参加によって示される“表層構造”に対して、地域社会の“深層構造”を示すものと考えることができる。従って、調査対象となる範囲を適切に設定すれば、理論上、特定の地域社会について、双方の“構造”をすりあわせながら分析を行うことが可能となる。そして、これによって森岡による第二の批判、すなわち集団参加分析の偏重を是正することができるとともに、地域社会の“実相”により迫った分析が可能になると考える。

但し、森岡の関心が個人行動の分析に置かれているのに対し、筆者の関心は“地域の社会構造”の分析にある。従って、森岡の批判が、生活構造分析の立場に立ってのものであるのに対して、筆者の方法論上の工夫は社会構造分析に関するものである点、留意されたい。ここで示す筆者の“関係構造”分析の試みは、[wellman, 1988] の“whole network”の概念を借りて、倉沢の社会構造分析を、より精緻化しようとするものにほかならない。

## 2. 仮説設定

地域社会における社会構造の在り方は、地域社会の特性によって大きく影響されると考えることができる。すなわち、その社会における社会構造の在り方は地域社会の特性によって規定されるといえる。地域社会構造に関するモデル形成は、これに留意して行われなければならない。このような地域社会の特性について検討したものとして、都市類型論を挙げることができる。「社会学における類型化と社会構造分析とは相互規定的関係にあり、構造分析（への視点）を欠く類型化は、単なる分類上のものではない」[鈴木、1973]と言われるが、ここでは、「日本の都市を、その社会・経済的特徴によって分類し、都市の社会構造と住民の生活構造を解明する手がかりに資そう」[倉沢、1968]との目的で提示された、倉沢による都市類型論を参考にしながら、ここで検討の対象とする都市の特徴とその社会構造について、言及することとしたい。

倉沢は、日本の地方都市に関して、特にその社

会関係における特質に注目して、伝統消費型都市と産業型都市という二類型を示唆した。ここで検討するのは、そのうちの前者、すなわち、伝統消費型都市にあたる。

倉沢の定義によれば、在来都市の大多数は城下町に起源を持ち、その社会構成は領主および家臣団、職人層、商人層の三つからなる。領主・家臣団は後背地農村からの高額な貢租によって生活する大消費階層であるから、都市の基本的な構図は“大量消費階層とこれにサービスを供給する職人・商人層”という構成をとる。

県庁都市は城下町から比較的直線的な移行をとげたものとされる。大消費階層としての領主・家臣団は崩壊し、県庁に代表される行政機関によってその機能を代替される。こうして県庁都市は、機能的にみれば城下町を構成した三つの社会層とほぼ類似した構成を取ることになる。したがって社会構成は、ホワイカラー、商店主層零細工業経営者ないし職人層、そしてこれら中小企業の労働者・店員層となる。県庁都市の場合には、周辺農村部に商品生産が広がるにつれて卸売業を主体とする商業中心地となる。そして、このような都市では、旧名望家層が地域社会の支配的な地位を占め、彼らを中心とした地域社会の運営がなされるとされる。名望家層によって指示される伝統的価値体系は、縁故関係や地域集団の綱の目によって地域社会のいわば受益層であるホワイカラーおよび自営業主層を規制し、地域社会の支配的なものの考え方を形造る。また、このような地域社会においては、人間が入れ替わることがあっても、社会構造は動かず、都市は停滞性を示すこととなるという。これが氏のいうところの“伝統消費型都市”の特徴である。

このような社会においては、町内会をはじめとする地域集団の役員は名望家層によって独占され、地域社会の運営が彼らを中心としてなされることは勿論のこと、彼らが個人的にも強い繋がりをもっており、しかも他の人々とは一線を画していると考えられる。つまり、地域社会において、町内運営の担い手層が、前後の世代との歴史的なつながりを持った形で、強固な構造の上に存在してお

り、町内社会は、彼らを中心とした社会関係から構成されていると想定することができよう。これに対して、地域社会をめぐる状況の変化は、地域社会の集団構造および関係構造に対して大きな影響を及ぼす。新規来住層の増加と地方名望家層の勢力の相対的な低下に伴い、地域社会における集団参加の焦点は地域集団から機能集団へと移行し、また、名望家層を中心とした地域内の関係構造は次第に崩壊すると考えられる。そして、果たしてそうなるか否かは、地域社会をめぐる諸条件の変化の性格と、それに対して名望家層たちが有効な対応を行いうるか否かにかかっている。

さて、本稿で検討の対象とするのは、伝統消費型都市の一つである山形市内において調査対象となった四つの町の中でも、商人町としての歴史を持つ三日町と鋳物の町として有名な銅町である。以下に〔倉沢、1968〕に依拠して、両方の町において特徴的な社会階層についてのモデルを提示することとしよう。

倉沢によれば、このような町には町工場主や商店主・熟練および半熟練労働者のうち”近代の産業組織に属さないものが多い。彼らの家庭と職場は近接し、伝統的な家族関係や近接関係が維持されており、移動性や流動性が少なく、随意集団は地域社会内に累積するとされる。これに対し、事務・販売を内容とするホワイトカラー層、大企業勤務の産業労働者層の職場は家庭と完全に分離している。但し、前者においては地域への無関心が指摘されるのに対し、後者においてはフォーマルな集団への参加は少ないもののインフォーマルな近所つきあいや随意集団がこれを補うものとされる。

本論で検討の対象とする山形市の二つの町は、元来自営業主の多いところであったが、近代化の過程でホワイトカラーあるいはブルーカラーへの世代間移動が起こる、あるいは地域内への新規来住層が増加するなど、様々な変動の過程にある。都立大学の研究グループは、山形の町について都合四つの町で世帯主を対象とした調査を行ったが、このうち今回の検討の対象とする二つの町および市の概況を、以上のことを念頭において示せば、次

のようにまとめられる

#### (1) 山形市の概況

山形市は、古くは南北朝動乱の時、奥州に下向した足利一族（斯波氏）の入部の後、その子孫最上氏の治めるところとなり、16世紀の終わりに最上義光によって本格的な城下町形成がなされたところである。山形では、当初奥羽海道沿いに町人の町屋敷が配置され、その外側に一般家臣団の屋敷が割り当てられた。また、職人は北部、町人は南部という配置計画により、社会層ごとの住み分けがなされ、区域ごとに市日商業が行われた経緯がある。後に幕府の支配の下におかれた際は、これに多少の変更がなされたものの、町の基本的な構造は変わることがなかった。城下町としての山形は、後背地たる村山地方で生産された商品産物を最上川の水運と奥羽街道によって運ぶ交通の要衝として栄え、京都などで染料として用いられた紅花の市場の開かれる場所として、また仏壇や鋳物の特産地として有名であった。山形の商人には近江商人の系譜を引く豪商や伊勢商人の系統を引くものが多く、多くは質屋や金融業を営み、次第に土地を集積し、地主へと成長する。商人町の東裏には商人町が配置されたが、そのなかには、塗師町、銅町など山形市の特産を作り出した町があった。元禄期の山形の町方の人口は、1万3千余人に達していたといわれる。

明治9年、山形県が成立すると、山形城下に県庁を置くことが決定される。当時県内第三位の町であった山形にあって、初代県令である三島通庸は、県庁所在地の名にふさわしい設備と内容を持つ都市をつくるために、かなり強引な都市建設を押し進めたという。そのためか、明治21年には人口2万5千人を超え、市政が施工されるに至った。山形の地域区分は明治4年の壬申戸籍の作成にあたっての三区への区分、翌5年の大区・小区制を経、大正15年には地域末端の行政組織として106の「区」が設置されるに至る。戦時下の総動員体制のもとにおける「部落会町内会整備要綱」（昭和15年）に基づいての町内会整備はこの区を基礎に行われ、112の町内会が組織された。また、小学校区を単位に7つ

の町内会連合会がつくられた。しかしながら、町内会の区域は必ずしも地域の諸集団を考慮したものではなく、両者の乖離は山形市の町内社会の性格に大きな影を落としている。

明治以降、戦前まで山形の変遷をみると、全般に県庁所在地としての政治行政的側面からの影響力が大きい。これに対し、地元の活力という点、少なくとも公官庁との連携という点では、山形市にはあまり芳しいものはなかった。昭和15年時点まで町内会の自発的な結成が見られた形跡はなく、その整備は戦時中を待たなければならない。戦後数多く発刊されている町内会・自治会の記念誌も、戦後になって新たに発展したものがほとんどである。山形は、明治政府の典型的官僚として名高い三島通庸に象徴されるように、城下町を前身とする伝統型の消費都市の中でも、県庁所在地としての性格が強かった。

では、戦後の山形市の展開はどうか。周辺市町村の合併や経済的な浮沈があるにもかかわらず、戦前を含めて山形市の人口は一貫して漸増している。山形市の人口増は一貫した自然増の大きさによって支えられており、好況期には転出が多く景気が減退すると転入が上回る傾向が認められる。高齢者の比率は高まりつつあるが、学齢期の人口の減少は少ない。産業別従業員数の推移についてみると、戦後一貫して第一次産業比率の低下と第二次産業比率の上昇が認められるものの、比較的早い時期から第三次産業の比率が非常に高い構成である。これに対し、従業上の地位別人口構成では、比較的早い時期から被雇用者の占める割合が高く、自営業主の占める比率が相対的に低い。自営業主は昭和40年までは自然減しその後増減を繰り返すが、その内容はこれを機に大きく変わってきた。家族総出で家業を営む伝統的なタイプから職住分離・小規模経営の近代的な経営形態への推移である。職住一致の伝統的な自営層がもともと薄いのに加え、近年においては自宅内就業者が激減している。

こうして、山形市は、伝統型消費都市の中でも比較的早くから新中間層たる雇用者を中心として展開した地方都市であり、そのような性格をもった地域組織や社会的ネットワークをこれまで蓄積

してきた都市であると特徴付けることができる。

## (2) 調査対象地の概況

さて、本稿で検討の対象とするのは、調査対象地となった四つの町のうち、自営業主の職人・商人といった地付き層、いわゆる旧中間層が町内での活動の中心となっているような二つの町である。彼らが中心となっているような地域においては、生活圏が広範囲に及ぶに至った今日においても、町内という“地域”を単位とした考察が大きな意味を持つと考えられる。以下に、二つの町の概況をみよう。

### 〔銅町〕

山形市旧市街地の北部、馬見ヶ崎川の河畔に位置し、鋳物の職人町として栄えてきた町である。その歴史は、古く平安年間に遡り、もとは現在の場所よりやや南寄りの地にあった。1604年、最上義光によって現在の場所に移る。以降、御免町の一つとして武具・仏具・唐金鋳物・梵鐘・灯籠などの鋳造が認可・奨励されることになる。

江戸時代中期以降になると、鍋・釜など近在向けの日用品はもちろんのこと、銅鉄器・仏具などが出羽三山へ参詣者に買い求められることでその鋳物は全国に広まり、町は繁栄を極めるが、明治維新後は神仏分離令と廃仏棄釈による出羽三山への参詣者の減少を受けて衰退。しかしながら、明治10年の第1回国勧業博覧会への出品を機に、置物・火鉢・鉄瓶類を中心に生産が増加した。明治37年には鋳物師30名を上京させたが、彼らの帰郷により新技術の導入が果され、これが日用品鋳物から機械鋳物への転換を可能にした。後の第一次大戦直後の好況の中で、山形鋳物業は最盛期を迎えることになる。

こうした歴史的経緯から、銅町の鋳物は、自動車部品・精密機械・工作機械などの機械鋳物と、茶釜や鉄瓶・置物・ブロンズ像などの工芸鋳物に二分される。1974年に西部工業団地内の鋳物工業団地へと機械鋳物工場の多くが転出してからは、町内には少数の美術工芸作家と零細業者が残存するだけとなり、現在では、老朽化した工場の放置、世

帯数・人口の減少、若年層の減少による高齢化の進展といった問題を抱えるに至っている。

1985年国勢調査の従業上の地位別就業者数では、銅町一丁目で雇用者151名(69%)、自営業者36名(17%)、家族従業者31名(14%)、銅町二丁目で雇用者429名(72%)、自営業者98名(16%)、家族従業員73(12%)と、雇用者の数が圧倒的に多い。銅町二丁目の世帯主を対象とした今回の調査では、製造業26名(27%)、商業15名(16%)、自由業1名(1%)、管理職4名(4%)、事務・販売職12名(13%)、生産・保安職12名(13%)、パート・アルバイト等3名(3%)、無職23名(24%)となっており、世帯主に限って言えば、自営・製造業主の占める割合は依然として大きいといえる。

さて、銅町では、講の組織が自治会を組織する基盤となった。戦時中の町内会の隣組は江戸時代に形成された“御日待講”の組を単位として組織されたが、これが戦後にも引き継がれて自治会の一番組、二番組、三番組となった。その後の市街化の進展の結果、現在では七つの組が銅町自治会を形成している。福祉部長以外の自治会員は二年任期で各番組から選出することになっており、各番組選出の役員が各役職をまわりもちしている。

前述のように、銅町では町の衰退が問題となっていたが、山形国体をめざしての都市計画道路の拡幅整備に伴う区画整理およびまちづくり事業などと関連して、自治会の中に「銅町のまちづくりを考える会」が発足。まちづくりアンケート調査などを行った。その他にもまちづくりに関連した集まりが形成されている。鋳物の振興発展・技術習得・販売促進を目指す「銅町鋳物振興会」(鋳物業の後継者層による)、毎月12日にまちづくりをテーマにした勉強会を行う「12日会」(商店の若手経営者層による)、1988年から地域活性化のイベント“たたら祭り”を行っている「DOM会」(銅町宮町まちづくりの青年部)がその代表的なものであるが、このほか地区内にある北部公民館を利用するサークルなどがあり、地域を超えた活動も行なわれている。こうした、まちづくり活動により、近年の銅町は新しい展開を見せつつある。

### 〔三日町〕

この町は、市の南部に位置する商人町であった。古くは交通の要衝にあって、隣接する十日町・八日町とともに宿場町として、そして最上商人の集まる商人町として繁栄を誇った。しかしながら、明治時代に至り、県庁を市北に設置した後、市役所を初めとする主要な機関が市北部に集中、県を南北に縦断する国道13号線の開通等により市の中心部が北へ移ったのに対し、既成市街地としての三日間では道路の拡幅を果たせず、モータリゼーションへの対応ができなかったため、市の発展から取り残された形となっている。商人町としての三日町は徐々に衰退の一途をたどっている。

三日町の人口は、一貫して減少傾向にあり、しかも高齢化が進行している。世帯構成を見ると、三四世代が30%にのぼる一方で、核家族世帯が14%、単身世帯が26%と小規模世帯も多い。居住歴からみると、通算35年以上のいわゆる“地付き層”が52%と多い一方で、10年未満の“来往層”も25%を超える。こうしたところに、三日町内部での地域内人口の二重構造を見て取ることができる。

従業上の地位別構成をみると、自営業主は33.7%であり、従業地の40%は自宅である。昭和60年度の市全体の産業別人口によると、卸売業は26.3%、自営業主は15.6%であり、自宅就業するものは23%となっているから、三日町は依然、商人の町としての性格を維持しているということができよう。ただし、その一方で通勤雇用者は増加傾向にあり、世帯主の現職が大別してホワイトカラー層と自営業主層から構成されていることから、三日町は徐々に商人町から住宅地へと変貌しつつあると考えることができる。近年の三日町には、老朽家屋の立て替えや商店の移転、アパート・マンションの建設など、目にみえる形で、地域社会の変化が現れてきている。

さて、この三日町にも「御日待講」があり、月一回の寄り合いの際の“ヤド”は輪番とされた。戦前には同業者組合の講もあったという。現在の講はもっぱら親睦的組織として存続している。

三日町二区の町内会は、戦後防犯上の必要から、また、行政との連絡の必要から、現在の会長が中

心となり、昭和24年に再編成されたものである。10～13戸を一組とする11組から構成され、現在の世帯会員数は144。町内会長は発足以来連続就任しており、輪番制度はない。なお、会長は広報委員をも務めており、町内会と行政とのかかわりは深い。町内会の主な仕事は行政との連絡、町内の親睦的な行事と祭りである。地域の祭礼としては、観音講、毘沙門講、八幡講がある。

三日町では先に見たような近代化の影響が認められるが、これらは地域の問題にも影を落としている。地域内老人比率の上昇と子供の減少という高齢化問題に加えて、来住者層、特に単身者、マンション・アパートの居住者の増加と彼らの町会活動への非協力的な態度は、地付き層の悩みの種となっている。また、道路建設とモータリゼーションの進展に伴って交通事故が増加しており、町会では交通安全の指導や道路環境の維持等、様々な形で対応しようとしている。

### 3. 調査結果の検討

本調査では、地域社会内部における二者関係のデータを取る関係上、適当な標本数をもつ地域を選出しての全数調査を行っている。なお、調査票は社会構造・社会意識に関するものと、回答者の地域内での二者関係に関するもの、およびフェイスシートである。対象者としては、基本的には世帯主を、やむを得ない場合はその配偶者あるいは肉親からの回答を得た。標本の全体数は578、うち424が回収され、回収率は73.4%であった。なお、銅町の回収率は68.1%、三日町の回収率は69.4%である。以下、調査によって得られたデータについて検討することにして。

#### (1) 地域集団

##### 〔銅町〕

この町では、町内居住歴が35年以上の者が50%、市内出身者が69%を占める。また、低学歴層、三四世代世帯、自営業主層の構成比率が高い。

さて、町内会構成員の中心となるのは自営業主

層である。誕生以来の町内居住者のうち83%が、そして、35年以上の72%が町内会に参加するなど、居住歴と町会／参加の関連は大きい。また、現職から見れば、自営業主層のうち87%までが町内会に参加していることから、地元出身の土着的自営業主層が町内会の実質的な担い手となっていると考えることができる。担い手層の再生産の割合は、自営業主層で最も高い。なお、銅町に特徴的なのは、ホワイトカラーの75%までが町内会に参加していることである。

町内会と他の集団との参加の関連についてみると、他集団との重複参加は、町内会以外の地域集団86.1%、機能集団83.3%となる。まちづくり運動が行われている銅町では、町内会と他の地域集団との間に組織的なつながりがあるか、あるいは個人の重複参加などの形での関連が多い。地域住民の間ではこのような形で有機的な関係が形作られており、それをもとにしての地域活動が行われていると考えられる。また、職住一致型のこの町では地域内の共通利害が今なお存在し、それ故に町内会と職域集団、特に同業組合・政治家の後援会とのかかわりが深いのだと思われる。

##### 〔三日町〕

この町は、銅町とほぼ似通った住民構成を持つ。なお、銅町との相違点をまとめると次のようになる。まず、年齢構成の点からは、高齢者層とともに、20歳代の比率が高い。年齢構成上の二極分化に加え、未婚層、高学歴層そしてホワイトカラーの構成比の高さがこの町の特徴といえる。

まずは、町内会参加についてみよう。この町では自営業層を中心とする地域内長期居住者層が町内会の主たる構成員となっている。なお、銅町とは異なり、この町ではホワイトカラー層の町内会参加は少ない。これは、三日町のホワイトカラーの多くが短期滞在者であることによると推測される。都市的な生活様式を好む彼らにとっては、町内会など地域集団の活動は疎ましいものと感じられ、また、会社と町内での赤い羽根募金の二重請求など、町内会活動に対する負担分担について納得のいかないものもあるようである。

他の集団との参加の重複についてみると、他の地域集団84.5%、機能集団67.3%、職域集団63.9%、近隣ボランティアアソシエーション82.6%となっており、町内会参加者の地域集団参加および近隣ボランティアアソシエーションへの参加は比較的高い。またこの地域では、宗教団体への参加が多く認められるのが特徴的である。三日町の住民には太子堂を祭る聖光会に入っているものが多く、また、三日町の住民はみな八幡宮の氏子である。この点も、両所の宮の氏子である銅町と似ている。ただし、三日町は町内会の区域が二つの小学校区に分かれ、六つの幼稚園に通うなど、町内社会全体としてのまとまりはあまりない。町内に幾つかの野球チームがあり、また、若者達のサークルがあるが、相互のつながりはほとんどないともいわれる。また過去においても、“商人の町”といいながら商店会をつくるというほどのことはなかったともいう。町のリーダー達は、都市化の過程にあって、伝統を守りながらのまちづくりを模索しているが、こうした条件のためになかなか軌道に乗れない状態にある。

## (2) ネットワーク構造

次に、二つの町で得られた二者間関係についてのデータをKSクラスター法を用いて分析し、それによって析出されたクラスター群およびクラスター間紐帯強度を用いて、各町の関係構造を描き出した。これによって、調査対象地区内における二者間関係の地域内部における相対的な意味と、地域社会内部の社会関係構造内における個々人の位置づけについての情報を得ることができる。ここではそうして描き出された対象地区の社会構造の特徴について、検討を加えたい。そのための手続きとして、強い関連強度によって結び付けられているクラスターのペアを、その成員数がクラスター分析に用いたサンプル数の半数に至るまで取り上げ、それらの間での関係を図示した。また、紐帯強度によってクラスター群のグルーピングを行ない、町内社会におけるクラスターの関連の状態を折出しようと試みた。

### 〔銅町〕

クラスター分析に用いた総ケース数は154。図示

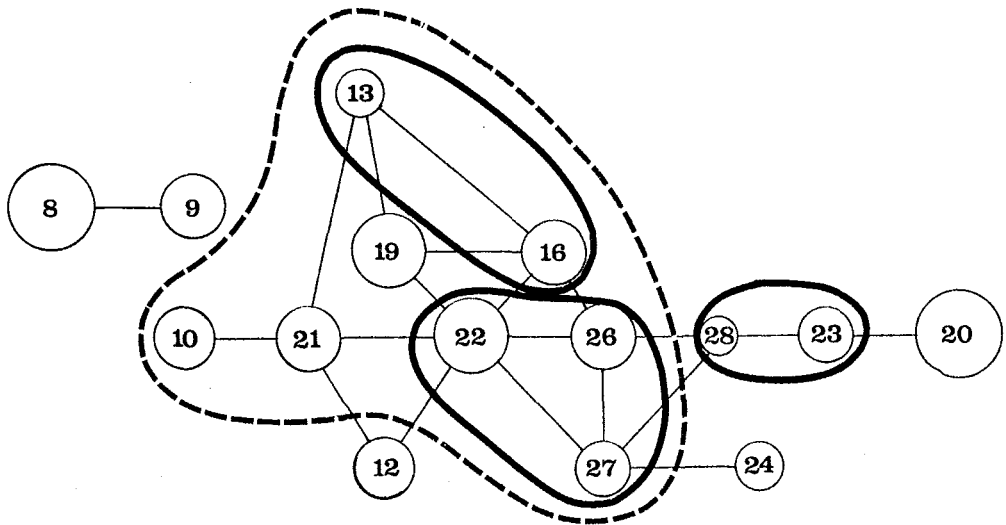


図1 銅町のクラスター関連図



したクラスターに含まれるケース数は76であり、これのほぼ半数に当たる。図中クラスター間をつなぐ線で表されている関連の強度は0.80以上のものである。また、このうち、関連強度1.00以上で結ばれているクラスター群を実線で、0.90以上で結ばれているものを点線で囲んで示した。

こうして析出された町内社会の構造をみると、銅町ではダイアド関係に基づく地域内ネットワークが比較的密であることがわかる。町内社会には強度な紐帯によって結び付けられた三つのクラスター群が存在し、それらは他のクラスターをも包摂しながら、互いに結び付いている。さらに、町内社会におけるクラスター群の構造ははっきりとした中心を持っている。次に回答者中、クラスター関連図にあるクラスター群に属するものを強い紐帯の保持者と見なし、それ以外のものと比較してどのような特徴が認められるのかを見た。これは、実質的に町内社会を形成している人々の特徴を理解する際に、大きな意味を持つと考える。

地域内で強い紐帯を持つものは、既婚者で三四世代同居、誕生以来町内または市内に住む地付き層で、しかも、子供が独立した者、町内に職場を持つ者、大都市居住経験がないものが多い。また彼らには、近隣に買い物や小旅行に一緒に行ったり、留守を頼んだり、あるいは病気・けがの面倒を見てくれるような人のいる者が多く、町内会・氏子会・老人会・青年団への役員参加者の比率が高いと同時に、ボランティアアソシエーションへの熱心な参加者の比率も高い。これに対し、弱い紐帯しか持たないものはこれとほぼ逆の傾向を示す。これらのことから、銅町内部のネットワークは主に、町内に職場を持ち、大きな世帯を構え、子育てを終えた地付き層によって構成されているといえる。彼らは、地域を活動の場とする諸集団に積極的に参加している。こうしたことから、地域集団の活動は町内のネットワーク構造と密接に関連した形で展開されているといえる。つぎに、町内社会の中心を占めるクラスター群の性格について見よう。

町内社会において中心となるのは、No. 22のクラスターである。このクラスターは、自営業主の父

を持ち、市内居住35年以上で50歳以上の高齢者からなる。現職に自営業主が占める割合こそ50%と少ないが、地域集団への参加は83.3%と高く、そのすべてが何らかの形で役員をつとめている。機能集団への参加は66.7%とやや高いが、役員参加はその半分に止まる。これと強く結び付いているのがNo. 26とNo. 27のクラスターである。両者とも父親の職業は100%自営業主であるが、前者では現職自営業および50歳以上が83.3%でありながら、ただし35年以上の市内居住歴を持つものは50%に過ぎない。地域集団への参加は100%だが、役員参加は33.3%に止まっている。機能集団への参加は50%、役員参加が16.7%と、No. 22に比して低調である。これに対し、No. 27は若き自営業主の集まりである。地域集団への参加は66.6%とやや少なく、役員参加はその半分の33.3%だが、機能集団には役員参加が66.6%と高く、成員の活動は機能集団に傾斜しているといえる。銅町の町内社会の次世代を担う、若きはえぬき集団といったところであろうか。これらが、銅町における町内社会の、いわば中核をなすクラスターである。

これと強くかかわりながらペアを作っているのは、No. 13と16である。両者とも父職自営業、市内に35年以上の長きにわたって住む、50歳以上の層が中心であるが、前者では現職が全て自営業であるのに対し、後者の自営業比率は20%と低くホワイトカラーが40%を占める。こうした違いはあるものの、両者とも地域集団への参加比率は高く（No. 13-100%、No. 16-80%）それぞれその半数が役員を務める。これは、世代間職業移動が行われたにもかかわらず、町内社会におけるつき合いが維持されていることを示すものと思われる。このペアが、ホワイトカラー比率の高いNo. 16を介して先の中核集団と結び付いていることは、興味深い。同質性を基礎としたクラスターに比べ、多様性を持ったクラスターの方が様々な紐帯を持ちうる可能性を秘めているということか、あるいは、銅町に特殊な事情が働いているのであろうか。

これら二つのクラスター群が中心となって、銅町の町内社会の関係構造が形成されている。それは個人属性における四つの柱、即ち父職・現職・年

年齢・居住年数と、地域集団への参加状態によって、大きく規定されているといえる。この町では、旧中間層を中核とした地域社会構造が、社会移動経験者や若い世代を取り込む形で形成されている。彼らは個人属性の点でもほぼ共通した傾向を持つから、彼らの保持する文化や価値観、態度の点で共通した傾向があると想定できよう。銅町では、こうした基本的な考え方を同じくする地付き層がいくつかのグループを形成し、それらの集団が互いにかかわり合いながら町内において活動を展開していると解釈することができる。

〔三日町〕

強度0.70以上のものを加え、その関連を点線で示した。実線および点線で囲んだクラスタの内訳は銅町と同じである。

三日町の町内社会における関係構造は、銅町のそれに比べて構造化されていない。否、というよりも、その構造が希薄になりつつあると解釈すべきであろうか。この町では、その中心部に強固な塊が存在するものの、その影響の及ぶ範囲は狭く限定されている。また、周辺に強固な繋がりが認められることはあっても、それが固く結び付いて全体構造を作り上げてはいない。まずは銅町同様、図に示されたクラスタに属する回答者とそれ以外の者について見ることにしよう。

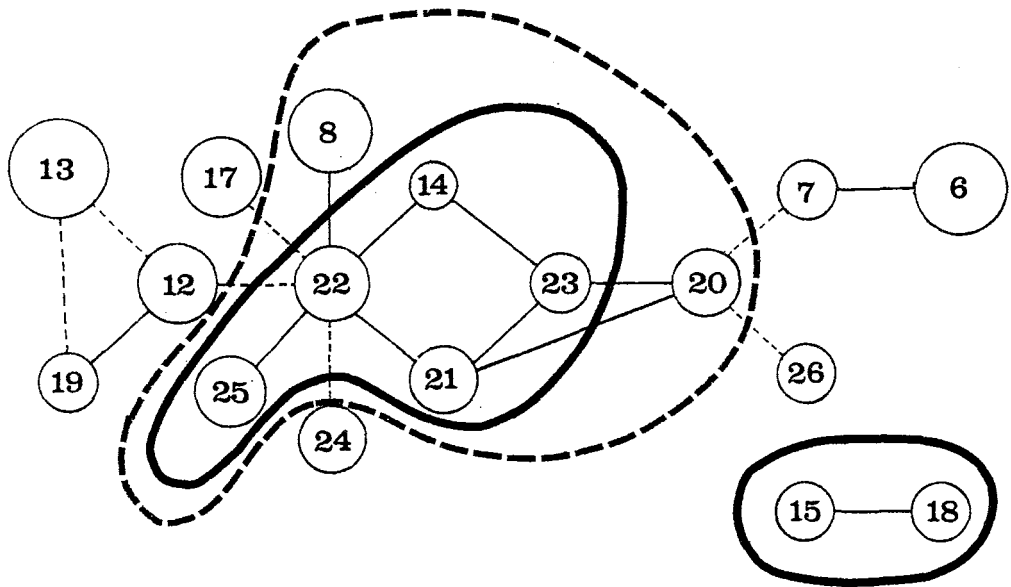


図2 三日町のクラスター関連図

クラスター分析に用いたケース数は133、図示したクラスターに含まれるケース数は66であり、これのほぼ半数に当たる。図中でクラスター間を繋いでいる線のうち、実線で表されている関連の強度は0.80以上である。ただしこれだけでは含まれるケースが47にとどまるため、三日町については関連

地域内で強い紐帯を持つのは、既婚のブルーカラー、50歳代で市内に職場を持つものに多い。悩みの相談や一緒に趣味・関心を持つ友人は地域ではなく職場にいるというものが多く、ちょっとした相談もむしろ仕事仲間と、という手合いが多い。各種集団への参加状況についていえば、地域集団

の単純参加者の比率が高く、政党への参加者が多いのが目立つ程度である。他の集団との関連は余り認められない。これに対し、弱い紐帯しか持たないものは、上記の点では強い紐帯を持つものとはほぼ反対の傾向を示す。また紐帯の弱いものには、人生上の問題を相談できる人が近隣にいると答えた者、そして、生活問題を専門サービスの利用によって解決していけるような町での生活を望んでいる者、買物や小旅行を共にするのに友人を選択するものの比率が多い。集団参加の点では、氏子会やPTA、宗教団体に役員として参加している者、また、職場の趣味・文化活動に熱心に参加している者が多い。この町では、弱い紐帯しか持たない者のフォーマルな集団への積極的な参加がみられるのが特徴的である。

三日町では、地域内ネットワークと諸集団の活動との間の乖離が、明確な形で認められる。強い紐帯を持つ者についていえば、彼らの地域活動は主に地域集団への単純参加という形に限定され、また、個人的な相談相手や趣味仲間には職場に多い。つまり、彼らの中では地域と職場が機能的に分離されており、自らの生活の中における地域の意味を見定めた上で地域活動へ参加するという、一種ドライな傾向を認めることができる。この町では、弱い紐帯しか持たない層にも特徴がある。彼らの中には、近隣に個人的な相談相手を持ち、氏子会や宗教団体に参加する地付き層と、PTAなどの機能集団へ参加するかたわら職場での趣味・文化活動に興じ、専門サービスの享受を望む来住層の二つを認めることができる。こうした形での住民層の分裂が、三日町の社会構造に大きな影を落としている。次に、No. 22を中心に中核を形成しているクラスター群について見よう。

No. 22は、三日町の町内社会において中核をなすクラスターである。父職・現職ともに自営業で市内居住歴35年以上、しかもその半分以上を50歳以上の高齢者が占める。地域・機能・職場集団への参加は全て75%と高く、地域・機能集団では役員参加がともに25%である。中核を形成するクラスター群のうち地域集団に役員を出しているのはこのほかNo. 21とNo. 23があるが、それらの性格は互いに異なっ

ている。No. 21は、父職自営業が75%、現職自営業が25%と低く、現職ホワイトカラーが25%を占める。しかしながら、その全員が35年以上の居住歴を持ち、50歳以上の高齢である。地域集団参加は75%。これに対し、No. 23は父職自営業0%、現職ホワイトカラー100%の異質な存在で、全員が50歳以上、町内会参加率100%となっている。これらの3つのクラスターの特徴は、商人町から住宅街へと徐々に変わりつつある三日町の、地付き層内部における社会移動の在り型を示しているようで興味深い。これらのクラスターが地域集団への参加を介して他のクラスターを包摂しつつ地域社会の潜在構造を形造っている。

三日町のネットワーク構造を形造っているクラスターの内訳を見ると、父職自営業、市内居住歴35年以上、年齢50歳以上の層が多く認められるのに対し、現職では自営業とホワイトカラーへの二極分化が認められる。また、自営業層は三日町での展望を諦めその活動の場を山形市一円に広げるなどしているため、町内を介しての活動は衰退しつつある。三日町のクラスター関連図は、町内の場における人間関係、あるいは地域活動の衰退、そして地域文化や地域に共通する価値観が次第失われていくさまを暗示するものと思われる。伝統消費型都市山形の商人町である三日町における都市化の過程は、この町を維持してきた地域住民によって形成される“町内社会”の、消滅の過程であったとはいえないか。

#### 4. 社会集団とネットワーク構造－地域社会の表層と深層－

地域社会の構造について、社会集団とネットワークに焦点をあてて考察を加えてきた。社会集団への参加が明確なメンバーシップに基づくものであり、集団の成員として自他共に正式に認知される性格を持つものである以上、これは地域社会におけるいわば顕在的な構造であるということが出来る。これに対し、二者関係に基づく親密な人々の小集団のネットワークによって形作られる構造は、地域社会のいわば潜在的構造であるということが

できる。この潜在構造は、地域社会の深層構造とでも呼ぶべきものであり、外部から認識することは難しい。しかしながら、町内社会が解体しつつある現代社会において、それ自体が直接的に地域社会の在り方を左右するという意味での力は小さいものの、地域社会における様々な集団の活動を通して間接的な影響力には大きいものがあると考えられる。そうした意味で、それは地域社会の在り方を決定する重要な要因であるといえる。

さて、本稿で検討した伝統消費型都市における地付き層中心の町内では、地元名望家層を中心としたネットワークが強固に構造化されているか否かが、地域社会の状況を知る鍵であった。調査対象とする地域社会の性格によって、その根幹をなす層の性格は異なり、地域社会における紐帯の意味は変わることであろう。また、ネットワーク分析に固執して、地域社会そのものより広い文脈の中での意味および地域住民にとっての地域社会の意味を問い直すことを忘れてはならない。しかしながら、ネットワークへの視点は、常に我々に何らかの知見をもたらすものと考えられる。ここで用いたネットワーク分析の方法論に、調査方法上の限界と分析手法上の問題があることは確かであり、それらの欠点は、慎重な文献研究と綿密な聞き取り調査によって補われなければならぬ。しかし、そのような条件が満たされるならば、地域社会の深層構造に関する研究は、従来の社会構造研究と併せ行われることで、地域社会を包括的に理解するための有力な手段となりうるとはいえまいか。

#### (注)

KSクラスター法を用いるに当たって本調査で使用した二者関係のデータの計測方法とその分析方法、およびその解釈方法とその方法論的検討について、以下に示す。

#### [調査方法]

今回の調査では、調査対象地として、或る特定の限られた地域を設定し、原則としてその地域に居住する全世帯の世帯主を対象として、町内の世

帯主名のリストを示しながら、次のような質問をすることによって、回答者がダイアド関係を持つ世帯主と、その世帯主との親密さ(関係の強度)を計測することを試みている。

質問1. この中で、道であったらあいさつをするような関係のお宅はいらっしゃいますか。該当する番号をすべて挙げてください。

質問2. それらのお宅とは、「0.道であったらあいさつする」、「A.立ち話をする」、「B.家にあがって茶飲み話しをする」ようなおつきあいをしているいらっしゃいますか。それぞれについてお答えください。

#### [分析方法]

このような方法によって集められた、世帯主の二者関係に関するデータについて、KSクラスター法により、地域内のインフォーマル集団とその相互関係、すなわち、先に述べた町内社会の潜在構造の析出を試みた。

手順1. 先のO,A,Bを、二者間の親密度の度合(交際量)とみなし、それぞれ1,2,3のスコアを与える。

手順2. 回答から得られた指名-被指名の関係を、マトリクス上に表す。

手順3. 回答によって示された二者間関係を対称的關係と見なし、2のマトリクスを作り直す。なお、指名-被指名間において互いのスコアが異なる場合には、親密度の高い方を優先し、両者の片方が欠損している場合は、得られているデータを用いて補う。

手順4. 3で得られたマトリクスを用いて、指名者および被指名者の全員について、関係の密度の高いものを集めてグルーピングを行う。

手順5. 4で得られたそれぞれのクラスターについて、それぞれのクラスター内の成員と他のクラスターの成員との間に存在する紐帯についてその強度の平均値を算出し、その値をもってクラスター間の関連強度とする。

このような手法を用いることで、全体集団から

交際関係が相対的に濃い幾つかのまとまりを分離することができる。その分離されたまとまりの一つ一つは、相互につきあいのある個人同士を意味し、それはインフォーマル集団（クラスター）と見ることができる。また、その集団間の関係の疎密は、地域全体の潜在構造のありさまをあらわすと考えることができる。ただし、仮に対象者を世帯主に限定し、調査対象を世帯主同士のダイアド関係に限ったとしても、そうして得られたデータは必ずしも世帯単位の関係を示すものではない。ネットワーク構造の意味するところは対象者によって、また、地域によって異なるものであって、その解釈が分析者に委ねられている点は、注意を要する。

#### 〔方法論上の問題〕

エリクソンによれば、クリークモデルは、他と比較して互いにより密接に結び付いている人々のセットを識別することに重点を置く。ここでクリークの密度は、実際に存在する全ての可能な紐帯の割合であるとされる。KSクラスター法は、ダイアド関係を「ある-ない」の二値で計るのではなく、両者の親密度について三段階で計測している。クリーク間についても、同様である。従ってそれは、エリクソンのクリークモデルを二者間の親密度に着目して拡張したもの、と考えることができる。エリクソンの関心は「態度の関係的基礎」であるが、ここでいう親密度の概念を手法の中に取り入れることは、彼の論述と適合的であるといえよう。なぜならば、二人の間の親密度が増すほど、二人の態度の類似性は増すと考えられるからである。

さて、クリークを析出する方法論について、いくつかの問題が存在する。密度に注目してクリークを析出する場合、その基準値をどのように定めるかが問題となる。完全に密度の濃いクリークを追いかけていくと、非常に小さなクリークが多く作り出されることになるが、それらのクリークの中には関連強度が高いために、互いに分離したものと見なしては意味のないセットが存在しやすくなる。クリークを析出する基準の決定は、調査対象

の性格や研究目的等を考慮した上での分析結果の検討を通して行われなければならない。KSクラスター法では、各クラスターによって説明される分散量と、クラスター間における分散量との比を用いて、クラスター結合の可否を決定している。そのため、データセットによって基準値は異なるが、分析対象データについて常に一定の分析手続きが用いられることになる。こうして析出されたクラスターとその間の関連強度は、分析結果を見ての検討を経なければならないが、ある意味においてエリクソンのいう方法論上の曖昧さという批判を免れているのではないかと考える。

なお、ネットワーク分析手法上の問題については、〔Wellman, 1988〕、〔平松, 1990〕、〔Michel, 1969〕他を参照のこと。本論で用いたKSクラスター法については、〔倉沢, 1968〕および〔倉沢, 1987〕に詳しい解説がある。

#### 〔解釈上の問題〕

エリクソンによれば、人は自分を類似している他者達と比較したがるものである。人は比較によってしか自らの態度の正しさを判断することができない。従って、個人属性の点で類似していると認知された人々の間には、比較された態度の面においても似通った傾向が形成されることになる。ただしその属性は、比較に用いられる既知の人の種類によって異なる。従って、生活経験は態度の一致を導く大きな要素といえる。また、二者関係にある人々の間に強い紐帯が存在すればそれだけ、態度の一致が形成されやすい。従って、或る二者の間における強い紐帯の存在は、両者の態度の類似性を示唆するものと考えられる。

析出されたクリークの成員の間では、ネットワーク内の任意の成員のセットに比べて、態度の類似性は高い。また、クリークの密度が増大すれば、それだけ類似性の程度は大きくなるとされる。さらに、クリーク間についていえば、強い関係を持つ二つのクリークの間では、類似した態度が認められる傾向があると考えられる。

最後に、クリークモデルの理論上の問題についても、触れておかねばなるまい。その一つは、ク

リークモデルが方法論として用いる“紐帯”の意味である。二者間の紐帯はつねに多重的、すなわち、様々な意味を持つものである。従って、文脈によって影響力を持つ紐帯は異なる。しかしながら、方法論上の限界から、我々は、これに立ち入ることはできない。次に、クリークの成員達は、文脈によっては、クリークの外部の人との比較によって自己の態度を決定することも考えられる。これらはクリークモデルの内在的な問題といえる。その一方で、クリークの外部との比較、そしてクリーク内における比較でさえも、より大きな社会的文脈から影響を受けるかもしれない。これは、クリークモデルの外在的な問題といえる。我々はクリークモデルを使用する際に、これらのことに十分な注意を払わねばならない。

なお、これらネットワークの解釈上の問題については、[Erickson, 1988] 他を参照されたい。

#### 参 考 文 献

- Erickson(1988) “The relational basis of attitudes”, *Social Structures: A Network Approach*, Cambridge Univ. Press.
- 平松 関 (編著) (1990) 「社会ネットワーク」 福山出版
- 倉沢進 (1968) 「日本の都市社会」 福山出版
- 倉沢進 (1987) 「東京の社会地図」 東京大学出版会
- 倉沢進 (1988) 「KSクラスター・アナリシスの方法」, 同編『環境観と地域住民活動』(科研報告書)
- 倉沢進 (編) (1992) 『伝統消費型都市における地域組織とネットワーク』(科研報告書)
- Michel, J. C. (ed.) (1969) *Social Networks in Urban Situations*, Manchester Univ. Press. 三雲正博ほか (訳)
- (1983) 「社会的ネットワーク」 国文社
- Mills, C. W (1959) *The Sociological Imagination*, Oxford Univ. Press. 鈴木広 (訳) (1965) 「社会学的想像力」, 紀伊国屋書店
- 森岡清志 (1984) 「都市的生活構造」『現代社会学』18号. アカデミア出版会
- 鈴木広 (1973) 「都市類型と発展」, 倉沢進編『社会学講座5 都市社会学』, 東京大学出版会
- 園部雅久 (1992) 「都市社会構造論序説」, 鈴木広編著『現代都市を解読する』ミネルヴァ書房
- Wellman, B. (1988) “Structural analysis: from method and metaphor to theory and substance”, *Social Structures: A Network Approach*, Cambridge Univ. Press.

#### Key Words (キー・ワード)

urbanization (都市化), social structure (社会構造), cluster analysis (クラスター分析), deep structure (深層構造), structured systems of social relationships (関係構造), networks (ネットワーク)

TOWARDS A BETTER UNDERSTANDING OF THE ACTUAL  
STATE OF THE LOCAL COMMUNITY

An Analysis of the Social Structure of the Local Community  
in Traditional Consumption-oriented Type of City

Toru Amano\*  
Yuetsu Takahashi\*\*

\*Edogawa University

\*\*Center for Urban Studies, Tokyo Metropolitan University  
*Comprehensive Urban Studies*, No.48, 1993, pp. 109-123

Abstract

The purpose of this paper is to refine a previous study of the social structure of Yamagata City conducted in 1989 and 1990 by a research group Yamagata City and analyzed them from the perspective of network analysis and structure analysis.

Adding a new perspective to the traditional approach, the KS-CLUSTER the analysis of the interpersonal network. By combining this approach with the traditional social structure analysis, we hope to get a better understanding of the real state of the local community.